

予、アものの心を知れりしより、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、イヤたびたびになりぬ。

ウいんじ安元三年四月二十八日かとよ。風激しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火出で来て、西北に至る。

果てには朱雀門・Ⅱ太極殿・大学寮・民部省などまで移りて、一夜のうちにⅢ塵灰となりにき。

① 傍線部Ⅰ～Ⅲの漢字の読みを答えよ。

② 二重線部ア～イの現代語訳をせよ。

③ 「かとよ」とあるが、3つの助詞の連続である。それぞれ何助詞か。

④ 火事が起きたのは何時ごろか。

⑤ 次のうち、本文の内容として正しいものを一つ選びなさい。

ア 作者は若いころから多くの不思議な出来事を見てきたと述べている。

イ 火は都の西北から起こり、東南へ燃え広がった。

ウ 火は一夜のうちに宮殿や役所まで焼き尽くし、灰となった。

エ 火災は昼頃に起こったため、多くの人々がすぐに消火活動を行った。

火もとは、^I樋口富小路^ウとかや。^{II}舞人を宿せる飯屋より出で
来たりけるとなん。吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに、扇をひ
ろげたるがごとく末広になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたり
はひたすら炎を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立て^エたれば、
火の光に映じて、（ア）紅なる中に、風に堪はず、吹き切られたる
炎、飛が如くして、一、二町を越えつつ移りゆく。その中の人、^{オウ}
つし心あらんや。あるいは煙にむせびて倒れ臥し、あるいは炎にま
ぐれてたちまちに死ぬ。あるいは身ひとつ、からうじて逃るるも、
資財を取り出づるに及ばず。（イ）さながら灰燼となりにき。そ
の費え、^カいくそばくぞ。そのたび、^{III}公卿の家十六焼けたり。まし
てそのほか、数へ知るに及ばず。すべて都のうち、三分が一に及べ
りぞ。

男女死ぬる者数十人、馬・牛のたぐひ^キ辺際を知らず。

人の営み、みなおろかなる中に、さしもあやふき京中の家を作
るとて、宝を費やし、心を悩ます事は、すべてあぢきなくぞ侍る。

⑥ 傍線部Ⅰ～Ⅲの漢字の読みを現代仮名遣いで答えよ。

⑦ ア～イに当てはまる語句を答えよ。

⑧ 二重線部ウ「とかや」とあるが、この後に続くと考えられる語句を歴史的仮名遣いで答えよ。

⑨ Ⅰにある接続助詞「ば」の用法として正しいものを選び。

ア 確定条件(偶然条件)

イ 確定条件(原因・理由)

ウ 仮定条件

エ 確定条件(恒時条件)

⑩ 才を現代語訳せよ。

⑪ カ「いくぞばくぞ」とあるが、この後に続くと考えられる語句を動詞＋助動詞の形にして答えよ。

⑫ キ「辺際を知らず」とあるが、何がどのような状態なのか説明せよ。

⑬ 最後の段落全文を現代語訳せよ。

⑭ 作者は大火の様子を描写することで、何を伝えたかったのか。

- ① I われ II だいごくでん III じんかい
- ② ア 物事の道理を理解するようになってから
イ だんだんと回数をかさねるようになった
- ③ 係助詞「か」格助詞「と」「間投助詞」よ「※」よ「は終助詞でも可
- ④ 午後8時ごろ(20時ごろ)
- ⑤ ウ
- ⑥ I ひぐちとみこうじ II まいびと III くぎよう
- ⑦ ア あまねく イ 七珍万宝
- ⑧ 言ふ
- ⑨ イ
- ⑩ 生きた心地がしたろうか、いや、しなかつたろう
- ⑪ あらむ
- ⑫ 火事で死んだ牛馬がどれほどであつたかが分からない状態
- ⑬ 人間の営みはおろかであるが、その中でも、こんなに危険な都に家を建てようと財産を費やし、心を悩ませることは特につまらないことではございません。
- ⑭ 人間の築いたものが火事で簡単に失われてしまう無常さを伝えようとしている。